

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 高野 修一 会員数 約16,200人)

T E L 0422-51-4554

1 前 文

平成30年3月告示の学習指導要領が令和4年4月に入学した生徒から年次進行で適用され、今年度入試が全面施行の最初の年にあたる。そこで今年度の共通テストの本試験、追・再試験から歴史総合の試験が施行された。

歴史総合は「近現代の歴史の変化に関わる諸事象」を、「歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる」ための「資質・能力を」育成するものである。その学習内容は、歴史的な見方・考え方を学び、問いを中心に構成する学習の重視、歴史の大きな変化に着目して世界と其中的の日本を広く相互的な視野から捉える学習を行う点が特徴である。また学習内容を示す項目は、知識を身に付ける項目とそれに対応して思考力・判断力・表現力等を身に付ける項目からなり、両者を貫く主題を設定して学ぶことで一体的な理解に至るという構造である。

以上の歴史総合の目標や内容、科目の構造に照らし合わせて、共通テストの設問について検討していく。平均点は、今年度は「歴史総合」が24.83点(50点満点)で、100点満点に換算すると49.66点であった。高等学校で日本史探究を学習してきた受験者にとって、世界史探究的な知識や思考を求められる箇所も見受けられた。次年度に向けては、「歴史総合」からの出題の難易度だけでなく、「日本史探究」、「世界史探究」の問題との難易度のバランスにできるだけ配慮をお願いしたい。以下、「歴史総合」の試験について検討した結果を申し述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

設問数は大問2題、小問16題の構成であった。出題範囲としては近代化～グローバル化の全範囲であったが、比較的近代化の比重が大きかった。第1問が「日本史探究」との組合せ、第2問が「世界史探究」との組合せであったが、出題されている内容は全般的に世界史探究の学習内容と重なる部分が大きく、日本史探究選択者には難しく見えたかもしれない。地域別に見ると、アジア（日本も含めた東アジア・内陸アジア・南アジア・東南アジア・西アジア）に関する出題が9問、ヨーロッパ（西ヨーロッパ・東ヨーロッパ・ロシア）に関する出題が3問、複数にまたがる出題が4問であった。

大問の構成自体は、会話文ベースや資料パネルを用いた発表の様子を想定するなど、今までの共通テストと同様の特徴がみられた。今まで「日本史B」、「日本史A」で出されていた史料が、「歴史総合」では基本的に現代語訳（意訳）に置き換わり、細かい知識ではなく歴史を概観することを求める出題や、史料文の中身というよりもその資料が持つ歴史的な意味を考えさせる出題が特徴的であった。

出題形式では、正誤問題（正文）、正文の組合せ問題が5題、正誤の組合せ、年代配列問題、語句の組合せが各2題であった。特に正文を選ぶ問題は時代の概観を確認するような出題となっていて、歴史総合という教科の特性が現れる出題となっていた。年代配列については、日本史探究と世界史探究を学習している受験者にとっては、正確な西暦年を求めるだけではなくて、関連する人物や歴

史的事象の背景を理解する力や、大まかな世界情勢の変容を把握する力が求められる良問で、短絡的な暗記を助長せずに、時代を通貫する学習を促すメッセージ性のある出題になった。ただし、歴史総合を必修科目のみで履修して他の必修科目（地理総合か公共）と組み合わせて受験する受験者には、正答にたどり着く思考の過程が見えにくい出題となっていた。

時代別では、近代化の範囲からの出題が多かった。また、出題自体は大衆化やグローバル化からの出題であっても誤選択肢を作る上で、近代化の内容が挙がることも少なくないため、結果的に近代化の内容が多くなった。また、指導要領上の分類でいう、「〇〇化への問い」の分野や「現代につながる諸課題」からの出題も見られ（移民・女性の権利など）、教科書をベースに学習することを求めるメッセージ性も加味されていた。

分野別では、文化に関連する出題が少なかった。歴史総合の教科書も、日本史探究や世界史探究などのように「文化史」というような分類を行っていない。一方で、「歴史の扉」や「〇〇化への問い」「〇〇の諸課題」などには文化に関わる項目が多く掲載されている。本来、「文化史」とは政治や経済、外交や社会経済の変化を背景にその時代の特徴が凝縮する形で歴史に残っているものを指し示すものである。今回も、第二問の「服装」は時代を通貫して問える文化史的なテーマであった。このように単なる知識による「文化史」ではなく、時代による変化や現在の私たちとつながりのある「文化的」な出題が続くことを期待したい。

以下、詳細を見ていく。

第1問は歴史上における境界に関する出題であった。3つの枠組みに分けられ、東アジアの境界・疫病による境界・移民に関連する境界であった。

問1は「主権国家からなる国際秩序」の説明と、18世紀のイギリスが貿易を行った港の組合せを答えさせる問題であった。「主権国家の国際秩序」が「朝貢や冊封」とは異なることは選べるが、地図中の選択肢が難しかった。特にイギリスと中国の関係であれば、19世紀の帝国主義の学習で長江流域の勢力図を学んでいるはずである。18世紀の自由貿易を求める港なのか、19世紀の自由貿易を求める港なのかを判別させる構造となっている。日本史探究との組合せで受験している受験者にとっては、知識問題として解答できるが、歴史総合を必修科目のみで履修して共通テストを受験する受験者にとっては難しかったのではないだろうか。

問2は正文を選択する問題であるが、正答となる選択肢は「清仏戦争」を基準に正誤を判別する構造となっており、難しかった。「清仏戦争」は日本史探究では甲申事変の学習で触れることもあるが、歴史総合の教科書に限って言えば掲載している教科書の数は非常に少ない。また、個別な歴史事象一つを基準に正答を選ぶ必要が出てくると、細かい知識の暗記を助長しかねない。せめて歴史総合の教科書で確実に取り扱うような事象で、1880年代を限定できるものを示してほしい。この問題は消去法で解かざるを得なかった受験者も多くいたと感じる。

問3の空欄アについては「穀物法」が唯一のヒントとなりイギリスを選択する問題となっているが、歴史総合の授業内で「穀物法」まで細かく扱うことはなく、難しかった。「穀物法」を知っていなければならない、というメッセージになってしまうので、個別の知識を前提にした空欄補充は控えていただきたい。

問4については、空欄補充前後の文脈が戦間期のことを話題にしていることから正答を導ける良問であったが、イギリスの「栄光ある孤立」という表現が言葉として歴史総合の授業内で説明されているかは難しい。不必要に用語を用いるのではなく、「イギリスが大陸との一定の距離をとっていた」など時代を概観できるようなフレーズで選択肢を構成してほしい。

問5は地図上の情報を用いて正誤の組合せを選ぶ問題で、資料活用という観点では歴史総合・共通テストらしい出題であるが、資料の読み取りだけが求められる問題となっており、歴史的な要素

も加味した出題になると良いと感じた。

問6はグラフの読み取りと既習事項の知識を問う問題で良問であるが、正答の「ベトナム戦争」が戦後の出来事であることがわかれば誤文だと判別できてしまう。もちろん、「ベトナム戦争」の細かい西暦を求める必要はないが、アジアの移民の増加が著しいのでわかりやすくなっている。

問7は、メモⅡが米中の接近を読み取れるのと、「四つの現代化」からある程度年代は判別できるが、メモⅠのプラハの春、メモⅢのキューバ危機を受験者がどこまで読み取れたらだろうか。ともに1960年代の出来事で前後の因果関係からでは判別できない。もちろん教科書には記載があるのは確かであるが、この三つの出来事が有機的な関係で並んでいるわけではない以上、受験者は何を手掛かりに前後関係を考えればいいのか、出題者が意図したところを伺いたい。意図なく、関係性なく、このような年代整序が出題されてしまうと、受験者は無機質な西暦を暗記する必要性に迫られてしまうので、年代整序の出題は特に、出題の意図と正答を導く受験者の思考の過程を意識していただきたい。

問8は歴史総合らしい出題で、このような形式は二択の組合せで平易な問題になってしまうが、授業内でも意識させたい枠組みでもあるので継続して出題する意義があると感じている。

第2問は服装などを切り口にした問題設定であった。

問1は空欄アの「タンジマート」は知識で埋めることはできるが、空欄イに関しては文脈で考えることになる。この時、歴史総合だけで受験する受験者は「トルコ帽子」が「世俗的」なのか、「イスラームの儀礼に配慮」した結果なのかをどのように判別すればよいのだろうか。また、この空欄アとイは、「タンジマート」に関連していることを問うという意味では、二つの空欄を答える上で必要な知識は共通していることになる。組合せの一方で内容を問うのであれば、もう片方ではその時期や背景、歴史的意義を問うなど、多角的な視点で出題する工夫が望ましい。

問2は単純な二択の組合せにはなるが、時期区分を問う問題となっていて、歴史総合の時代を概観するという趣旨にも合致した良問であった。

問3は日本の日米修好通商条約のことを想起すれば正答が選べるが、選択肢①を誤答と選別する際は、「1860年」という西暦のみが根拠となってしまっている。「ノート」の資料からドイツが統一前であることや、1880年代にヴィルヘルム2世が即位することは読み取れない。西暦の暗記だけによる正誤の判別は、安易な西暦の暗記を助長してしまうので、極力避ける工夫をしていただきたい。

問4は日本の綿糸生産量に関して述べた文について、「力織機」と「紡績機」の用途の違いを考えさせる問題になっている。単なる知識を聞くのではなくて、道具の発展や、それを促した背景などを問うような問題も考えられたのではないだろうか。また、グラフから読み取れることについても、日本の「帝国議会開設後」が西暦でどの時期をさすのかが歴史総合の学習においてどれほどの意味を持つのか、そして、「帝国議会開設」と「綿糸の生産量の増大」にはどのような関係があるのか、を考えると、選択肢の作り方にも工夫を求めたい。

問5は「モダンガール」がキーワードになっているが、「モダンガール」自体定義付けがあいまいな概念であることが指摘でき、登場した時代はある程度判別できても、何をもって「モダンガール」であるのかを歴史総合の中で扱い理解する必要性はないのではないだろうか。結局「パネル1」の読み取り問題となっており、歴史的な視点での問いにはなっていない。せめて、実物の写真や絵を載せるなどの工夫が必要であったと考える。

問6は資料の読み取りとファシズムとは何かという知識を組み合わせ思考する問題で良問であった。

問7は時代の変化を言葉だけではなくイラストから選ばせる問題で、資料活用の取組が問われる良問だったと感じる。ただ、国家元首の写真は載せるのであればもう少しわかりやすくするか拡大

することで思考を促してほしい。パネルを読むことで「あ・い」が選択でき、知識で「う・え」を選択する問題で、歴史総合らしい問題であった。

問8はメモⅠが明らかに21世紀の話であると判別できるので、「日本の男女雇用機会均等法」と「アメリカの公民権運動」の前後関係だけが問題となっているが、それも難しくはない。女性の権利を問い直す問題は現代の私たちにもつながる諸課題の一つであり、第二次世界大戦後の大きな運動の変遷を問うこの問題は歴史総合の問題としては適切な設問であったと考える。ただし、時期区分の判別は簡易であった。

3 総評・まとめ

今年度は、大学入学共通テストにおける歴史総合としての初の出題となった。教科書の作成や授業の構成など、この3年間の手探りの作業の一つの指針がこのテストであることに疑いはないだろう。その意味で、今回のテストはそれまでの歴史科目より一層批判的に分析され、来年度以降にその改善がされることが望まれる。特にこの「歴史総合」の科目は、「日本史探究」「世界史探究」との組合せで受験している受験者だけではなく、必履修科目の組合せの一つとして受験している受験者も存在する。そのような生徒は日本史探究、世界史探究を履修していない可能性が高い。つまり、日本史探究や世界史探究で学習する知識や概念を前提に正答を導かざる得ない問題は、こういった生徒にとって圧倒的に不利になってしまう。今年の問題で言えば、第1問の「穀物法」を手掛かりに「イギリス」を選択させる問題や、第2問の「タンジマート」の西洋化の方向性などは、世界史探究を学習していれば、単なる知識でしかないが、歴史総合しか履修していない生徒からすれば、授業でも、試験問題にも、手掛かりが見い出せない問題になっている。その意味で、教科の特性を踏まえた上で、歴史総合の問題作成に当たることを強く要望する。

個別の問題については前節で指摘しているとおりに、歴史総合の理念に合致した、時代を概観し、歴史の推移に着目した出題が一定数ある一方で、西暦や個別の知識のみに依拠して正答を選ばせる問題が散見された。歴史総合という教科が教科設置時に掲げられた理念を維持するためには、こういった入試問題において、その理念を出題にまで浸透させることが不可欠であり、大学入学共通テストこそ授業者にとっての最大の指導における道しるべであるという観点を今一度踏まえて作問に当たっていただきたい。